



Shibuya Culture Project

渋谷カルチャープロジェクトの発端

— 「これまで弱かったつながり」が秘める強さ —

原 知章

2024年12月上旬、私はカフェ・アプレミディのウェブサイトを見て、新宿御苑のセレクトショップ&カフェ PARKER で『Interior Music ~ Cafe Apres-midi meets ACME Furniture』というアルバムのリリース・パーティーが、12月14日に開催されることを知った。DJには橋本徹さんのお名前があり、「もしかしたら、橋本さんとお話できるかも……」という淡い期待を抱いて、その日、私はPARKERに出向いた(図1)。パーティーと名がつくイベントに参加するのは、本当に久しぶりのことだった(若い頃は夜型人間だったのだが、すっかり朝型人間に変わってしまっていた。また、30代から40代にかけては公私ともに忙しく、コロナ禍以降は出不精になっていた)。



図1：新宿御苑 PARKERにて (2024.12.14 筆者撮影)

もともと人見知りをするほうである私は、会場で橋本さんの姿をお見掛けしても、最初は声をかけることができなかった。会場をうろうろしていた私に声をかけてくださったのは、FJD こと藤田二郎さんだった。私は Nujabes のファンであり、藤田さんが手がけられた

Nujabes のアルバムのアートワークにも強く心惹かれていた。その藤田さんと初めてお話し、しかも同学年であることを知り、舞い上がっていたところ、藤田さんが「橋本さんに紹介しますよ」と言ってくださって、それで橋本さんに初めてきちんと自己紹介させていたのだった。

実はずっと以前にカフェ・アプレミディを訪れた際に、お店に橋本さんがいらっしゃって、カウンター越しにお話しさせていただいたことはあったのだが、そのときは、他のお客さんもいらっしゃったうえ、緊張のあまり、少ししかお話することはできなかった（ちなみに、そのときには『Free Soul Nujabes』のアルバム2枚を購入）。

念願かなって、ようやく橋本さんときちんとお話することができた私は、（ライトなファンではあったけれども）1990年代からずっと橋本さんのファンだったことや、橋本さんのおかげで、あの時代の渋谷で楽しい時間を過ごさせていただいたことを熱く語ってしまった。

私にとって橋本さんは——一方的に私淑していた——「恩師」であり、これまでの教育や研究のなかでも、橋本さんや橋本さんのお仲間たちから渋谷という「キャンパス」で学ばせていただいたことを生かしてきたつもりだった。また、就職後、地方暮らしが長かった私は、頻繁に足を運べたわけではなかったが、橋本さん（そして、カフェ・アプレミディのスタッフの武田誠さん）が、時代の荒波をこえてカフェ・アプレミディという「場」を守ってきてくださったことが、色々な面で心の支えになっていた。いつか、橋本さんにお礼の気持ちを直接伝えることができればと思っていたのである。

つづく